

Title	村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』の謎：なぜつくるはシロから虚偽のレイプ告発をされたのか
Author(s)	津田, 保夫
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 33-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88348
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』の謎 — なぜつくるとはシロから虚偽のレイプ告発をされたのか —

津田保夫

1. はじめに

村上春樹の13作目となる長編小説『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』は2013年4月12日に刊行されると、瞬く間に百万部を突破するベストセラーとなった。発行元である文藝春秋社の販売戦略により内容に関する情報は伏せられていたため、飢餓感を煽られたハルキストたちは書店前に行列を作った。彼らは出版社から事前に告知されていた『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』という奇妙な長い作品タイトルから内容を推測するしかなかったけれども、そこには物語の主人公と内容が端的に提示されている。このタイトルは接続詞「と」とその直後に置かれた読点によって「色彩を持たない多崎つくると」「彼の巡礼の年」の二つの部分に分けられるが、前者は主人公とその属性を、後者は物語の内容を表しているのである。また、この分割されたタイトルの二つの部分は作品の構成にも対応している。つまりこの小説の全19章のうち、前半の第1章から第9章までで主人公の「色彩を持たない多崎つくると」が抱えている問題状況が説明され、後半の第10章から第19章までで「彼の巡礼の年」の出来事が語られている。

作品前半（第1章～第9章）の内容はおおむね次の通りである。主人公の多崎つくるとには名古屋での高校時代に4人の親しい友人がいたが、彼らはみな色を含む苗字（赤松、青海、黒埜、白根）を持っていた。自分だけ名前に色彩を持たない多崎つくるとはそのことに多少の屈託を抱えていたけれども、彼ら5人は親密で「乱れなく調和する共同体」（p.24）¹のようなものを形成しており、その調和的な関係は高校卒業後につくる一人が名古屋を離れて東京の大学に進学した後も続いていた。ところが大学2年生の夏に帰省したときに突然、他の4人の友人たちから絶縁されてしまう。彼はその理由を聞くこともできず、死ぬことを考えるほどの深い傷を心に負ったまま16年の歳月が経過するが、恋人の沙羅に促されてようやく、かつての友人たちを訪問して自分が絶縁された理由を知ろうと決意する。

作品後半（第10章～第19章）でつくるとは旧友たちを訪ねる旅に出て、これが「彼

¹ 村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』からの引用等は文春文庫版（文藝春秋社、2015年）から行い、カッコ内にページ数を記載する。なお、この5人の完全な共同体的調和性に関しては作品内で何度も類似の表現で言及されている。「自分は他の四人を必要とし、同時に他の四人に必要とされている — そういう調和の感覚」（p.10）、「乱れなく調和する親密な場所」（p.32）、「乱れなく調和した共同体」（p.67）、「美しい共同体と、そこにあったケミストリー」（p.116）、「パーフェクトな組み合わせ」（p.194）、「そこには見事なばかりの調和があった」（p.250）、「そのサークルの完璧性」（p.250）など。

の巡礼の年」を意味している。なお「巡礼の年」というのは作中に出てくるリストのピアノ曲集のタイトルであり、その中でもとくに「ル・マル・デュ・ペイ」はかつてシロ（白根柚木）が弾いていた曲として回想され、重要な意味を持つ。しかしシロは6年前に亡くなっていることがわかったため、つくるはまず名古屋に残っているアオ（青海悦夫）とアカ（赤松慶）を訪ね、さらにクロ（黒埜恵理）の住むフィンランドまではるばる赴いていき、ようやく自分が旧友たちから絶縁された理由を知る。シロがつくるからレイプされたと告発し、彼らがつくるがそんなことをするはずはないと思いつつも、心を病んだシロを護るためにやむなくつくるを切り捨てたのだった。しかしそれによって旧友たちも深く傷ついていることを知ったつくるは彼らとの関係を回復し、心の傷を癒やすこともできたのである。

こうしてみると表面上のストーリーラインは非常に明快で、そこに見られる探求と発見、謎と解明、喪失と回復というような単純な物語構造は、初期の小説『羊をめぐる冒険』など他の多くの作品にも認めることができる。² しかしこの作品には、そのような単純な物語構造に回収されない重要な問題が残されている。多崎つくるは自分がかつての友人たちとの「乱れなく調和する共同体」から突然追放された理由を求めて巡礼の旅を行い、シロがつくるからレイプされたという虚偽の告発をしたためだという答えを発見し帰還する。これが物語の主要な内容であるが、その過程において新たに発生した別の重大な問題が未解決のまま物語は結ばれているのである。それは、なぜつくるはシロからそのような濡れ衣を着せられたのかという謎である。そしてこの謎の中に、この作品の重要なテーマの一つが含まれているように思われる。

2. シロの告発と記憶の作り替え

自分が仲間たちから追放された謎の答えを求めて巡礼の旅に出たつくるが最初に訪れたのは、地元名古屋に残ったアオが働いているレクサスのショールームである。そこで彼はアオから、「シロはおまえにレイプされたと言った」（p. 186）と聞かされる。アオは「おまえがそんなことをするなんて、おれにはとても信じられなかった」（同上）が、「シロはどこまでも真剣だったし、思い詰めていた」（p. 187）。彼女はまたつくるにレイプされたときの状況を「かなりリアルに細部まで」（同上）説明し、感情的になって、「身体が震えて、形相が変わるくらい激しい怒りにとらわれていた」（同上）。そこで「ちょっと変だと思ふところもなくはなかった」（pp. 188-189）けれども、「彼女

² 蓮實重彦は1980年代の小説を論じた『小説から遠く離れて』（河出書房新社、1994年）の中で、当時のかなりの数の小説に「同じ物語的な構造」（p.1）があることを指摘し、それらは「見たところ何の共通点も持たない発想から出発しながらも、作中人物が演じつつある物語的な機能や、果たすべき行動の形態という点で多くの細部を共有し、まるで一つの物語を多様に変奏しあっているように見える」（同上）と述べている。そして「同じ物語を多様に変奏しつつある小説家」（p.2）の筆頭に村上春樹の名を挙げ、その『羊をめぐる冒険』をとくに井上ひさしの『吉里吉里人』と比較している。『色彩を持たない多崎つくと、彼の巡礼の年』も「宝探し」の主題などいくつかの点で、それらと共通する物語構造を持つ作品として位置づけることができるだろう。また大塚英志は『物語論で読む村上春樹と宮崎駿』（角川書店、2009年）で、村上春樹と宮崎駿における「構造しかない物語」の意味を考察している。

がそこまではっきり言うからには、そこにはある程度の真実は含まれているはずだ」(p. 189) と考え、彼らをつくるを絶縁することにしたのである。もちろんつくるは「シロをレイプしたことはないし、彼女と性的な関係を持ったこともない」(同上) のであり、現実問題としてはシロは虚偽の告発をしたことになる。その理由についてアオは「皆目わからない」(p. 190) と答えるしかない。しかし彼自身が言ったように、シロの告発には「ある程度の真実」が含まれており、それを明らかにすることが、シロによる虚偽の告発の謎を解く重要な鍵となる。

最終的にアオから「おれはおまえを信じるよ」(p. 195) と言われたつくるが次に会いに行ったのは、同じく名古屋に残ってセミナー会社を経営するアカである。そしてつくるがシロをレイプしたという告発については、アカもアオと同じく「おまえはもともとそんなことをする人間じゃない」(p. 220) ことはよくわかっていると答える。それでもシロの話は「演技なんかじゃない」(p. 221) と思うしかないほど真に迫っており、「彼女は本当に傷ついていた」(同上) し、「そこには本物の傷みがあり、本物の血が流されていた」(同上)。そのため「どんなかたちにせよ、疑いを差し挟めるような雰囲気じゃなかった」(同上) という。しかしつくるを追放した後、時間が経つにつれてシロの言動に「筋の通らないこと」(p. 222) が少しずつ増えてきて、彼らはそこに「何かまずいもの」(同上) があることに気づく。つまり「シロはおそらく心を病んでいた」(同上) のである。しかしなぜつくるが標的にされたのかについてはアカも「それはおれにはわからん」(p. 223) と答えるだけであった。

シロの虚偽の告発は彼女の心の病と関係があると考えられるが、その手がかりが得られそうなのは、同じ女性の友人であったクロである。そこでつくるは旅行会社に勤める恋人の沙羅に飛行機を手配してもらい、クロの住むフィンランドへと旅をする。それはつくるにとって初めての海外旅行であり、また彼の最も重要な巡礼の旅となる。したがって名古屋在住のアオやアカの場合とは異なり、クロと会うまでにはいくつかの障害を克服しなければならない。

まずフィンランドへ到着してヘルシンキのクロの自宅に電話をかけるが留守で、つくるにはフィンランド語の留守番電話メッセージが理解できない。そこで援助者として登場するのが沙羅の友人のオルガであり、彼女の助けによって、クロは夫とともにヘルシンキから百キロ離れたハメーンリンナの湖畔のサマーハウスに滞在していることがわかる。つくるはレンタカーで高速道路を通過してハメーンリンナへと向かうが、「道の両側はおおむね森」(p. 302) であり、「エルク」(p. 301) にぶつからないように注意しなければならない。こうしてフィンランドの森³ を通り抜けてハメーンリンナに到着しても、「彼らの住まいを見つけるのは、オルガが予言したほど簡単ではなかつ

³ このような状況が『ノルウェイの森』と類似していることは、すでに大森望と豊崎由美が指摘している。大森望・豊崎由美「村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』メッタ斬り！」(河出書房新社編集部編『村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』をどう読むか』河出書房新社、2013年) p.89 参照。

た」(p. 305) が、ここでも親切な一人の老人が援助者として現れて案内してくれたため、ようやくつくるはクロたちのサマーハウスへと到着することができた。しかしそこにいたのはクロの夫と犬だけで、娘たちを連れて散歩に出てきたクロが帰ってくるまで、つくるはさらに待たされるのである。

小説内につくるがアカと別れたのは第 11 章で、クロとようやく会えるのが第 16 章であるから、全 19 章のうちの 4 章がその間の経緯に費やされていることになる。このことから、クロの訪問がつくるの巡礼の旅におけるクライマックスをなしていることがわかる。またこの場所はつくるの日常的世界から遠く隔てられた一種の異界⁴ であり、この物語は異界訪問譚の構造を持っているともいえる。そこではクロは本名のエリに戻り、死者となったシロも本名にちなんでユズと呼ばれることになる。

そうしてようやく再会したエリ (クロ) からつくるは、ユズ (シロ) の虚偽の告発の真相を聞かされる。ユズが何者かによってレイプされたのは事実だった。そして妊娠し流産した。しかし、つくるからレイプされたというユズの告発をエリは「最初から信じていなかった」(p. 331) のである。それにもかかわらずつくるをグループから追放したのは「ユズのことを護らなくてはならなかったから」(同上) だった。つくるがユズをレイプしたという告発は事実と反しているが、「ユズ自身はそれが本当に自分の身に起こったことだと、最後まで信じていた」(p. 336) し、「それがあの子にとっての真実の最終的なヴァージョンになった」(同上) のである。

ユズが何者かによってレイプされたことは現実にも起こったことであり、それが彼女の心の病の直接の原因であろう。ところが彼女の記憶の中でレイプされた相手がつくるへと書き換えられ、それが彼女にとっての真実となってしまった。そのためエリはユズを護るために、事実と反するとわかっていながらも、ユズにとっての真実である虚偽の告発を受け入れて、つくるを切り捨てるしかなかった。これがつくるが巡礼の旅で探し求めていた、彼が仲間たちから追放された謎に対する答えである。

しかしここで新たな謎が生じてくる。それは、なぜユズの記憶の中でレイプされた相手がつくるへと書き換えられたのかという謎である。これについてエリは「どこからそんな妄想が出てきたのか、なぜそんな作り替えが行われたのか、私には今でも理解できない」(同上) し、「たぶんもう誰にも解明できないと思う」(同上) と答える。その後ユズは心の病から完全に回復することはなく、エリが結婚してフィンランドへ移住した後に、一人暮らしを始めた浜松市内のマンションで何者かによって絞殺された。「あの子には悪霊がとりついていて」(p. 347) というエリをつくるは抱きしめ、「肌を寄せ、悪霊の長い影を振り払わなくてはならない」(p. 352) と思う。では、この「悪霊」とはいったい何を意味しているのだろうか。

⁴ 後にクロはつくるとの別れ際に、そのあたりの森には「悪いこびとたち」(p.371) が住んでいるので気をつけるように警告するが、そのこともこの地が一種の異界であることを示している。

3. つくるの無意識的欲望と「悪霊」の正体

シロの告発はつくるにとってまったく身に覚えのないことであった。しかしその一方で彼は、自分の中に「何かしら曲がったもの、歪んだもの」(p. 261)が潜んでいて、「自分でも気づかないまま、どこか別の場所で、別の時間性の中で、本当にシロをレイプし、彼女の心を深く切り裂いてしまったのかもしれない」(同上)とも考える。そしてシロの死に関しても、「その五月の雨の夜、自分の中の何か、自分でも気づかないまま浜松まで赴き、そこで彼女の鳥のように細く、美しい首を絞めたのかもしれない」(p. 361)と思うのである。いずれの場合も「自分でも気づかない」のであるから無意識ということであり、つくるの無意識の中にシロをレイプし首を絞めたいという「曲がった」あるいは「歪んだ」欲望が潜在していたのであろう。

そのようなつくるの無意識的欲望は彼の夢の中に表出している。彼はシロ(ユズ)とクロ(エリ)の二人が一緒に出てくる性夢を何度も見たが、「彼が夢の中で射精したのは、常にユズの中だった」(p. 360)。彼は無意識の中にシロに対する性的欲望を持っていた。それゆえ「夢の中での行為に過ぎないとしても、自分にも何かしらの責任があるのではないかという気がしてならなかった」(pp. 360-361)のである。

つくるがシロへの性的欲望を無意識下に抑圧していたのは、仲間たちとの調和的な共同体を維持するためであった。彼らの間には「誰かと誰かが二人だけで何かをしたりするのは、できるだけ避けよう」(p. 24)というような「無言の取り決め」(同上)があった。「そうしないとやがてグループがばらばらにほどけてしまうかもしれない」(同上)からである。そのようにして「僕らの間に生じた特別なケミストリー」(p. 25)を大事に護っていくことが目的となっていた。そのためつくるは「そこに異性の関係を持ち込まないように注意し、努めていた」(p. 26)し、シロとクロをどちらも魅力的だと感じながらも、「僕としてはできるだけ彼女たちのことは考えないようにしていた」(p. 27)。つまり、沙羅も指摘しているように「性的な関心をどこかに押し込めなくてはならなかった」(p. 250)のである。⁵

しかし、このようにしてつくるの無意識の中に抑圧された性的欲望が自分に向けられていることを、おそらくシロも無意識的に感じ取っていたのであろう。シロはつくるを告発したとき、つくるには「表の顔からは想像もつかないような裏の顔がある」(p. 187)と言ったが、この「裏の顔」こそつくるの無意識的欲望を意味していると思われる。そしてシロにとって、自分に向けられたつくるの無意識的な性的欲望はきわめて不快なものであったにちがいない。なぜなら、クロによると「ユズは昔から一貫

⁵ 大澤真幸も性的欲望や恋愛感情がつくるたちの共同体にとって破壊的となりうることを指摘しているが、彼はつくるのシロに対する性的欲望よりもむしろクロのつくるに対する恋愛感情にシロの妄想の原因があるとする。つまりシロの妄想は共同体を崩壊から守るための無意識の反応であり、彼女はそのためにクロの愛の対象となっているつくるを排除しようとしたというのである。大澤真幸「ソフィーは多崎つくるを選ぶだろうか？」(河出書房新社編集部編『村上春樹『色彩を持たない多崎つくと、彼の巡礼の年』をどう読むか』河出書房新社、2013年) pp.53-54 参照。落合貞夫『「悪」とたたかう村上春樹』(文藝春秋社、2021年)も同様の見解を提示している(pp.273-274)。

して性的なものごとに対する嫌悪感をとても強く持っていた」(p. 337) からであり、それは「むしろ恐怖心と言っていいかもしれない」(同上) ほどのものであった。しかしシロもまた仲間たちの調和的共同体を維持するために、つくるの性的欲望に対する強い嫌悪感や恐怖心を、やはり無意識下に抑圧していたのであろう。そして何者かによってレイプされたとき、彼女の無意識の中をつくるによるレイプへと記憶の作り替えが行われたのではないだろうか。それゆえシロにとっては、つくるによってレイプされたということが真実となってしまったのである。⁶

レイプによって心に深い傷を負ったシロは強度の拒食症になるが、それは「生理を止めたかったから」(p. 338) であり、彼女は「女性であることをやめたがっていた」(同上)。そのような自己の女性性の否定あるいは拒絶の根底には、先に述べたような彼女が「昔から一貫して」持っていた「性的なものごとに対する嫌悪感」あるいは「恐怖心」があるのだろう。そのような性に対する強い嫌悪感がどこから生じたのかについて、クロは「私にもわからない」(p. 337) と答えるが、もしかしたら幼児期に性的虐待などの何らかのトラウマがあったのかもしれない。

シロはクロたちの努力によってなんとか拒食症からは回復したが、彼女は「もう昔の彼女ではなくなっていた」(p. 339)。つまり「心からいろんなものがぼろぼろとこぼれ落ちて、それにつれて外の世界に対する興味も急速に後退して」(同上) いき、やがて「ほとんどすべてのものごとに対する興味を失って」(p. 340) しまったのである。そうしてやがてクロが結婚によりフィンランドへ去って行くとシロは浜松で一人暮らしを始め、マンションの自室で何者かによって絞殺されるが、その半年ほど前にシロと会ったアカは彼女の印象について「生命力がもたらす自然な輝きを失っていた」(p. 229) と語っている。そしてアカは「あいつは肉体的に殺害される前から、ある意味では生命を奪われていた」(p. 230) と感じずにはいられなかった。

そのように考えると、シロは何者かによってレイプされ、何者かによって絞殺されたけれども、その何者かは主体的意志を持たないたんなる実行の道具の役割を果たしたに過ぎない。シロをレイプしたのはつくるの無意識下に抑圧されていた性的欲望であり、その出来事がシロの生命力を奪っていったと言うこともできる。それゆえシロがつくるからレイプされたと言ったことに対して「自分には思い当たるところはないと断言することはつくるにはできなかつた」(p. 360) し、シロの死に関しても彼は「自分の中の何か」(p. 361) が「自分でも気づかないまま」(同上) 浜松まで赴いて、彼女の首を絞めたのかもしれないと考え、あくまでも象徴的にはあるが「僕はユズを殺したかもしれない」(p. 362) と言うのである。

つくるは自分の心の中にそのような「濃密な闇」(同上) が潜んでおり、「ユズの中

⁶ つくる自身も自分の性夢について、「それは想像の中で彼女たちをレイプしているのと同じことだ」(p.146) と考え、「彼女たちは、つくるの顔を一目見ただけで、彼の夢の中で何が行われているかを、すべてを見抜いて」(同上) しまい、「彼の汚れた身勝手な妄想を厳しく糾弾するかもしれない」(同上) と恐れている。その糾弾がシロの無意識的な記憶の作り替えによってなされたのである。

にもおそらくユズの内なる濃密な闇があったに違いない」(同上)と感じる。そして「その闇はどこかで、地下のずっと深いところで、つくる自身の闇と通じあっていたのかもしれない」(同上)と考える。シロの「内なる濃密な闇」は彼女が昔からもっていた性的なものごとに対する強い嫌悪感と恐怖心であり、もしかするとその原因としての幼児期の性的トラウマがあったのかもしれない。それがつくるの心の中の「濃密な闇」としてのシロに向けられた無意識的な性的欲望と通じ合い、虚偽のレイプ告発を引き起こしてシロの生命力を奪っていった「悪霊」の正体であろう。

人間の心の奥底にそのような「濃密な闇」が存在し、それが「地下のずっと深いところ」で通じ合っているという考え方は、村上春樹の他の作品にも見られる。たとえば初期の長編小説『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』に登場する「やみくろ」はいわば「濃密な闇」の集合体のような形象である。⁷ 小説の中では「やみくろ」は地下の暗闇の中に生息する不気味な謎の生物として描かれているが、村上春樹は地下鉄サリン事件の関係者へのインタビュー集である『アンダーグラウンド』の中でも「やみくろ」に言及し、それは「私たちの記憶のアンダーグラウンドが、あるいは集団記憶としてシンボリックに記憶しているかもしれない、純粹に危険なものたちの姿」であり、「そしてその闇の奥に潜んだ<歪められた>ものたちが、その姿のかりそめの実現を通して、生身の私たちに及ぼすかもしれない意識の波動なのだ」と述べ、「私たちは何があるかと、<やみくろ>たちを避けて、日の光の下で生きていかなければならない」⁸と警告している。

この危険な「やみくろ」に象徴されるものは、すべての人間が心の奥底の暗闇の中に持っているものであり、それが「悪霊」としてシロをレイプし絞殺したのだと比喩的には言うことができるだろう。そしてそのような「やみくろ」的なものが自分の中にも存在していることを、つくるは彼の巡礼の旅において発見したのである。

4. 楽園の喪失と居場所の確保

シロが生命力を失っていき死に至るきっかけとなったのはレイプ事件であり、それはシロの無意識においてはつくるによるレイプであったが、それによって引き起こされた仲間たちとの調和的な共同体の崩壊もシロの変化に大きな影響を与えていると思われる。その「乱れなく調和する共同体」(p. 24)は彼らにとって一種の幸福な「楽園」(p. 412)であった。そこでは「五人はそれぞれに『自分は今、正しい場所において、正しい仲間と結びついている』と感じ」(p. 10)、「自分は他の四人を必要とし、同時に他の四人に必要とされている——そういう調和の感覚があった」(同上)。

しかしそれは安定的で永続的なものではなく、偶然的で脆く壊れやすいものであっ

⁷ その他にも『かえるくん、東京を救う』の「みみずくん」や『騎士団長殺し』の「二重メタファー」、あるいは『1Q84』のリトルピープルや『めくらやなぎと眠る女』の「めくらやなぎ」なども、それと同類だと考えることができるだろう。

⁸ 村上春樹『アンダーグラウンド』(講談社、1999年) p.774.

た。つまりそれは「たまたまもたらされた幸運な化学的融合」(p. 10)であり、「自分の意志で選んだというより、天の恵みのように自然に」(p. 266)もたらされたものに過ぎなかった。したがって彼らはそのような脆くて壊れやすい共同体を維持するために、「できるかぎり禁欲的」(p. 26)にならざるをえなかったし、「そこに異性の関係を持ち込まない」(同上)ようにしなければならなかった。

ところが、前節で論じたように、つくるにはシロに対する性的欲望があり、それが無意識下に抑圧されていたし、またクロはつくるに対して「異性として強く心を惹かれていた」(p. 335)が、それを「心の中に深く隠していた」(同上)。そのことにはアオもアカも、そしてつくるも気づかなかったが、「ユズにはもちろんわかっていた」(同上)のである。つくるの自分に対する性的欲望もおそらく感じ取っていたシロ(ユズ)は、自分たちの調和的な共同体の必然的な崩壊を予感したのであろう。

物語の終わり近くになって、つくるはそのようなシロの気持ちを想像し、「シロがあたのとき求めていたのは、五人のグループを解体してしまうことだったのかもしれない」(p. 412)と考える。

高校時代の五人はほとんど隙間なく、ぴたりと調和していた。彼らは互いのあるがままに受け入れ、理解し合った。一人ひとりがそこに深い幸福感を抱けた。しかしそんな至福が永遠に続くわけではない。楽園はいつしか失われるものだ。人はそれぞれに違った速度で成長していくし、進む方向も異なってくる。時が経つにつれ、そこには避けがたく違和が生じていっただろう。微妙な亀裂も現れただろう。そしてそれはやがて微妙なというあたりでは収まらないものになっていったはずだ。(同上)

そして「シロの精神はおそらく、そういう来たるべきものの圧迫に耐えられなかった」(p. 413)のであり、「おそらくは性的な抑制がもたらす緊張が、そこで少なからぬ意味を持ち始めていたに違いない」(同上)とつくるは想像する。

シロがよくピアノで演奏した曲として作品内でたびたび登場するリストの『巡礼の年』の「ル・マル・デュ・ペイ」は、そのような失われゆく楽園に対する郷愁を表しているのだろう。⁹そしてその楽園喪失の最初のきっかけとなったのは、つくるの東京移住である。つくる自身は他の4人と異なり自分だけ名前に色彩を持たないことで多少の疎外感を感じていたが、彼は「グループに静かな安定感みたいなものを与えていた」(p. 194)のであり、その彼が東京へ出ていったことにより共同体は不安定となり、解体へと向かっていく。

「乱れなく調和する親密な場所」(p. 32)としての共同体という楽園を喪失した仲間

⁹ 「ル・マル・デュ・ペイ」(Le mal du pays)の「ペイ」(pays)はここでは「故郷」の意味であり、シロやつくるにとっては彼らの調和的共同体こそが故郷であった。

たちは、それぞれ新たな居場所を見つけなければならなかった。アオは名古屋でレクサスの有能なセールスマンとして働き、愛する家族を持つようになった。しかし彼は「家族に対してだって、あのときのような混じりけのない自然な気持ちは、なかなか持てない」(p. 195) である。アカも名古屋でセミナー会社の経営者として成功したが、結婚には失敗し、自分が同性愛者であることの苦悩をつくるに告白する。それでも彼は「なんとか自分なりの居場所を見つけて生き延びている」(p. 218) のである。

そしてクロは、つくるの追放後はシロの世話に追われて「人生の目標みたいなものが見えなく」(p. 342) なり、「自分に自信をなくしかけていた」(同上) が、友人に誘われて陶芸を始め、「それが私が長いあいだ探し求めていたものであったことを発見した」(同上)。そして陶芸を学びに留学していたフィンランド人男性と結婚し、フィンランドへ移住して陶芸を行い、「この国に骨を埋めてもいいと心を決めた」(p. 344)。樂園を喪失した彼女らにとって「この現実の世界を生き延びていくのが大変」(p. 364) ではあったが、どうにか自分の居場所を見つけて「私たちはこうして生き残った」(p. 365) のであり、「できるだけこのまましっかりここに生き残り続けること」(同上) を責務だと感じている。ただシロだけは現実世界に自分の居場所を見いだすことができず、何者かによって絞殺されたのである。

一方つくるは仲間たちの共同体から放逐された後、しばらくは死ぬことばかりを考えていたがどうにか立ち直り、東京の鉄道会社で天職ともいえる駅舎を設計管理する仕事に就いて「自らの人生からの亡命者」(p. 406) として生きていた。しかしかつての友人たちを訪ねる巡礼の旅によって、彼らもまた心に深い傷を負って生きてきたことを知り、傷や痛みや喪失を通して彼らとの「真の調和」(p. 350) を回復する。

魂のいちばん底の部分で多崎つくるは理解した。人の心と人の心は調和だけで結びついているのではない。それはむしろ傷と傷によって深く結びついているのだ。痛みと痛みによって、脆さと脆さによって繋がっているのだ。悲痛な叫びを含まない静けさはなく、血を地面に流さない赦しはなく、痛切な喪失を通り抜けない受容はない。それが真の調和の根底にあるものなのだ。(p. 350)

つくるは死んでしまったシロとは会うことができなかったが、巡礼の旅から帰ると恋人の沙羅こそ自分にとってなくてはならない存在だと感じる。かつてのつくるのシロに対する無意識的欲望は沙羅へと意識的に向けられる。沙羅はいわばシロの分身である。木元沙羅と白根柚木は二人とも名前に木を持っており、木元と根も類似している。また沙羅という名前には色はないが、沙羅の花は白色である。つくるはいわば形を変えて現れたシロの分身としての沙羅と、新たなケミストリーの結合による完璧な調和的關係性を築こうとするのである。¹⁰

¹⁰ なお、沙羅と柚はそれぞれ『蜂蜜パイ』と『騎士団長殺し』で登場人物の名前に用いられている。

5. おわりに

多崎つくと友人たちの調和的共同体は、最初から脆くて壊れやすいものであった。その存続のために彼らは性的欲望を無意識下に抑圧していたが、性的なものに嫌悪感や恐怖心を持っていたシロは、つくるの性的欲望が無意識のうちに自分に向けられていることを感じ取り、何者かによりレイプされたとき、それをつくるによるレイプへと記憶を書き換えた。それによってつくるは追放され共同体は崩壊し、シロは生命力を失くしていった。それからつくるは何年も心の傷を負ったまま生きてきたが、恋人の沙羅に促されて友人たちを訪ねる巡礼の旅に出て、新たな調和的関係性を回復した。村上春樹の長編小説『多崎つくと、彼の巡礼の年』は、このような完全なる調和的関係性としての楽園の喪失とその回復の物語として読むことができるだろう。

しかし、この作品では死も一つの大きなテーマとなっている。主人公の多崎つくるは作品の始まりで「ほとんど死ぬことだけを考えて生きていた」(p. 5) し、結末では沙羅が自分を選んでくれなければ「おれは本当に死んでしまうだろう」(p. 418) と考える。いずれの場合も調和的な関係性の拒絶が原因となる。つくるが仲間たちとの共同体で体験し、沙羅との新しい関係性に求めるものは、ジャズピアニストの緑川が語る死のトークンを持つ者にのみ見えるという「真実の情景」(p. 103) とも共通している。そこでは「すべてがひとつに融合して」(同上) おり、「君自身もその融合の一部」(同上) になる。そのような「真実の情景」を知りながらも得られないものは、「薄っぺらで深みを欠いた」(同上) 人生に我慢するか、死に向かうしかない。

つくるはいわば死のトークンのようなものを持っていたと言っているかもしれない。それゆえ「あの四人から存在を否定されたとき、多崎つくとという少年は事実上息を引き取った」(p. 51) のである。いったん死んでしまった彼を再び生へと引き戻す役割を果たしたのは沙羅であろう。つくるの再生のきっかけとなったのは嫉妬の夢であり、その夢の中で彼は「一人の女性を何よりも強く求めていた」(p. 53)。それが誰なのかは明らかにはされていなかったが、彼はその女性のすべてを強く求めた。この夢の中の誰とも知れない女性が後に沙羅として現れたのである。¹¹ そして沙羅はつくるにとって、死から再生したシロの分身だったともいえるだろう。

¹¹ つくとと沙羅のその後については甲田純正が指摘しているように、ハッピーエンドになると思われる。つまり沙羅は長く付き合いたいというつくるに対して「とりあえず片付けなければならないこと」があると答えて「謎めいた微笑み」(p.260) を浮かべるが、それはつくるが見た男性との関係を片付けることを意味していると考えられる。これについては甲田純正『多崎つくるはいかにして決断したか』(晃洋書房、2014年) pp.127-129 参照。なお甲田は同書において緑川の語る「死のトークン」をハイデガー的な死への先駆として解釈している。